会　議　録

１　会議名

令和３年度第２回上越市総合教育会議

２　議題（公開・非公開の別）

上越市教育大綱の策定方針について（公開）

３　開催日時

令和４年２月３日（木）午後１時３０分から３時００分まで

４　開催場所

上越市役所木田庁舎４階　４０１会議室

５　出席者（敬称略）

・構 成 員：上越市長　中川幹太

上越市教育委員会　教育長　早川義裕、教育長職務代理者　大谷和弘、委員　本間倫子、委員　山縣知子、委員　小林晃彦

・市長部局：理事　八木智学、総務管理部長　笹川正智、総務管理課長　瀧本幸次

・事 務 局：教育部長　市川　均、歴史文化指導監　中西　聰、教育総務課長　新部彰、教育総務課参事　戸田正明、学校教育課長　野田　晃、社会教育課長　小嶋栄子、文化行政課長　新保誠吾、スポーツ推進課長　吉田正典、オリンピック・パラリンピック推進室長　米川美樹、教育総務課副課長　佐藤晴美、教育総務課副課長　加藤弘之、教育総務課企画係長　小酒井洋平、教育総務課主事　山田美沙子

６　発言の内容（要旨）

（１）開会

【教育部長】

本日はご多用の中、ご出席いただきありがとうございます。ただ今から、上越市総合教育会議を開会いたします。私は、本日の進行を務めます、教育部長の市川です。よろしくお願いいたします。

本日は、会議の構成員であります市長、教育長及び全ての教育委員の皆様から出席いただいております。また、関係職員として、市長部局では理事、総務管理部長、総務管理課長、教育委員会では、歴史文化指導監、教育総務課長、教育総務課参事、学校教育課長、社会教育課長、文化行政課長、スポーツ推進課長、オリンピック・パラリンピッ

ク推進室長が出席しております。それでは、ただ今から、上越市総合教育会議を開催いたします。

お手元に配布いたしました次第に沿って進めさせていただきます。

はじめに、中川市長から挨拶をお願いいたします。

（２）市長あいさつ

【中川市長】

教育委員の皆様におかれましては、日頃から市の教育行政の推進にご尽力いただくとともに、市政全般にご協力いただいておりますことに、心から感謝申し上げます。

全国的に新型コロナウイルスの感染拡大が続く中で、子どもたちへの感染が広がっており、当市の小・中学校においても、必要に応じて速やかに臨時休業の対応をとっていただくなど、学校現場などにおいて、子どもたちの健康を守り、安全な教育環境を維持できるよう、全力で取り組んでいただいているところであります。市といたしましても、市民の皆様に、感染対策の徹底などを繰り返し呼びかけているところではありますが、1 日も早い収束を願うばかりです。

さて、この総合教育会議は、平成 27 年の教育委員会制度の改正に伴い設置したところであり、今回で 7 回目の開催となります。本日の会議では「上越市教育大綱の策定方針について」を協議題とし、令和 4 年度に終期を迎える上越市教育大綱の改定について、その方向性を確認した後に、上越市のまちづくりや教育について、幅広に意見交換をさせていただきたいと考えております。私が目指す上越市の姿と、皆様の教育に対する思いを重ね合わせ、全ての市民に分かりやすく、心にとどめていただける大綱を作っていきたいと考えておりますので、忌憚のないご意見、ご発言をお願いいたします。

結びに、本日の会議がこれからの教育行政の推進に向けて、有意義なものとなりますよう重ねてお願い申し上げ、開会の挨拶といたします。

（３）協議

【市川教育部長】

それでは、協議に移ります。

ここからは、上越市総合教育会議運営要領第 5 条の規定に基づき、中川市長に進行をお願いいたします。

【中川市長】

それでは、協議に入ります。時間は限られていますが、有意義な会となりますよう、皆様のご協力をお願いします。

本日の協議題は、「上越市教育大綱の策定方針について」です。協議題について説明を受けた後、質疑を行う順で進めてまいります。令和 5 年度からの次期教育大綱の策定について、事務局から説明してください。

【新部教育総務課長】

私から上越市教育大綱の策定方針について説明をさせていただきます。

初めに、現行の教育大綱の策定経過と課題でございます。教育大綱の策定経過につきましては、すでにご案内のとおりですが、改めて簡単に申し上げますと、平成 27 年 4 月施行の法令の一部改正を受け、市長が教育大綱を策定することとされました。当市では法令の施行と時を同じく、第 6 次総合計画の策定がなされましたことから、同計画の教育に関連する施策を改めて整理し、これを教育大綱に位置付けたということです。現在の教育大綱の内容は、総合計画や総合教育プランのそれぞれに重なりが多いため、役割の違いが分かりにくく、また、その内容が子どもの施策に偏っているという点もあり、これらが、次期教育大綱の策定に向けて考えなければならない課題であると認識しています。

次に、次期教育大綱の策定の考え方についてです。今ほどの課題に対応するため、策定方針を定め、次期教育大綱の策定作業を進めてまいりたいと考えています。まず、一つ目の方針は、次期教育大綱は当市における教育に関する施策のおおもととなる理念を表すものにしたいということです。二つ目の方針は、その教育大綱の理念に多くの市民が共感し、共有することのできるメッセージ性の高いものにしたいということです。そして三つ目の方針は、市長部局において策定作業を進めている第 7 次総合計画においては、次期教育大綱の理念に基づいた基本的な施策を規定することとし、また、教育委員会が並行して策定作業を進めていく、第 3 次総合教育プランには具体的な取組を規定することとして、それぞれの役割を明確にしたいというものです。

次に、次期教育大綱、第 7 次総合計画、第 3 次総合教育プランの関係性についてです。今ほど説明した、策定の考え方を図で表したものでございます。教育大綱は市長が、総合教育会議に協議しながら定めることとされています。教育大綱の内容につきましては、今ほどの説明のとおりですが、当市の教育に関する施策のおおもととなる理念を表すものとし、第 7 次総合計画には、その教育大綱の理念に基づいた基本的な施策を、第 3 次総合教育プランには、具体的な取組を規定するというものです。

最後に、今後のスケジュールについてです。本日、令和４年２月３日総合教育会議においては、今ほど説明いたしました方針についてご了解いただきたいと考えております。その上で、４月には、教育大綱の内容について意見交換いただきながら、素案の策定作業を進めていき、５月の総合教育会議において、その素案の内容を審議いただきます。最終的には７月の公表を目指してまいりたいと考えております。

説明は以上となりますが、本日は次期教育大綱策定の考え方、方針について、ご確認、ご了解いただきたいということでございます。

【中川市長】

今ほどの説明について、ご意見、ご質問はありませんか。

【教育委員】

意見、質問なし

【中川市長】

それでは、次期教育大綱は、上越市における教育に関する施策の根本となる理念とし、その理念に基づいた基本的な施策を総合計画に、具体的な取組を総合教育プランに規定するものとして、策定作業を進めていきたいと思います。

次期教育大綱策定に関わる協議はここまでとし、残りの時間は意見交換をさせていただきたいと思います。教育委員の皆さんとは、今日、ようやくこういった時間を持つことができましたので、まずはそれぞれの思いを語り、上越市の未来を一緒に考える中から、次期教育大綱策定のヒントやキーワードが見えてくるのではないかと考えております。

初めに私から、私が考える上越市の目指す姿、どのようなまちづくり、未来づくりが必要なのかということについて、お話しさせていただきます。

私の今の住まいは桑取地区にあり、この地区には谷浜小学校と潮陵中学校があります。教育委員会が進めているコミュニティ・スクールという施策の中で、地元の方たちが先生になって、田んぼを教えてくれたり、あるいは鮭を収穫して燻製にしたりする活動を中学校の子どもたちも行っています。そのような中で、地元の方たちが子どもたちを支えながら、ともに育てていく。そして、何かおかしなことがあったら、支えていく。これは、理想的なかたちだと思います。桑取・谷浜地区にはひとり親世帯はありませんが、市の中でひとり親世帯、あるいは核家族、子どもに関係する大人の人数が少ない世帯では、どうしてもいろいろな事情があって、問題が起こりやすくなっていると思います。そういうときに、やはり地域の方も子どもに目をかけて、ともに支えていくことが

大事だと思います。セーフティネットの数を多くして、子どもたちを見る大人の人数が多い方が、子どもたちを健やかに育み、良い土台になると思います。そのため、コミュニティ・スクールはますます推進していかなければならないと思います。

一方で、今日も新聞報道に出ていましたが、小・中学校の児童・生徒数が減って、統合の問題が出てきています。私は中学校区単位が一番、人の顔が見えると思っているので、コミュニティを維持していくためには、中学校区単位が基本の地区だと考えています。もちろん親が子どもの友だちが多いほうが良いということもありますが、例えば、谷浜小学校と潮陵中学校が直江津へ統合した場合、ほとんどの地元の方が先生としての関わりが無くなってしまうと思います。今日新聞に出ていたのは、大島、安塚、浦川原で、比較的地区としては中学校が一つになってもともに歩んでいけるとは思いますが、詳しいことは現場にいないので分からないこともありますが、中学校区をどうやって統合していくのかということも一つの課題ですし、小学校も同じです。コミュニティと子育てという視点で、統合問題についても捉えていかなければいけないと思っています。例えば、地元が近ければ体育大会や文化祭に、自分の子どもが出ていなくても見に来る方もいます。あまりにも遠いと誰も見に行かなくなってしまいます。桑取小学校と谷浜小学校が統合したときも、やはり谷浜小学校に来る桑取の方は大幅に減ったと思います。高齢化にもよると思いますが、そのような事態も起こりますので、小学校は致し方ないとしても、中学校については、そのような視点が必要になってくると思っています。

親に暴力を受けたとしても、やはり子が親を愛するのは必然ですし、子どもの逃げ場がないこともあります。子育てを家庭だけに任せるというのは、やはり、今の時代の流れの中ではできないと思っています。社会が子どもを支えながら、ともに歩んでいくという姿をこれからも作っていかなければいけませんし、現場の講師になっていただく方を探すのが大変かもしれませんが、そのあたりも努力していただいて、できるだけ先生も子どもたち一人一人を見つめられるように教育をしていただきたいと思います。今とにかく上越市から出ていってしまう高校生が多いので、上越市から出たとしても、上越市に帰ってきたくなるような良い思い出を、小・中学校、高校のときに作ってもらいたいという思いが非常に強くあります。そういう意味で私たちは協力して取り組んでいかなければならないと考えます。教育に関係している方々もそうですし、地域の皆さんも自分たちの地域を愛して、そして子どもたちを愛して、そして何かあったら上越市に帰っておいでと言えるような、教育にしていかなければいけないと考えています

ので、どうか皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。

では引き続き教育委員の皆さんから順番にお話しいただきたいと思います。今ほどの私の考えに対するご意見ご感想も含め、事前にお伝えした、人を育てる、地域をつくる、未来を拓くといった観点から、皆さんの思い、考えをお聞かせください。

【大谷委員】

私は今年の3月で人の親になってから18年になります。子どもを育てるにあたって、ＰＴＡ活動等で学校と関わるようになってから約12年が経ちました。現在でもＰＴＡの役員や中学校の部活のコーチを通じて、子どもと触れ合う機会も多くあります。また、企業人として、社会で仕事をしているので、若い方、特に新卒、社会に出てすぐの方と話す機会もあります。そういった中で、教育の問題点を簡単にまとめました。要は今、学校教育が目指している人間像と社会が必要としている人間像にずれがあるのではないかと思います。このずれがあるからこそ、今の新卒の3年以内の離職率が4割近い数字になっているのだと思います。それはもちろん、会社側が時代に合わせた、しっかりとした仕事のマッチングをしていない部分もあります。しかしながら、どうして辞めてしまうか考えたときに、少なからず、教育にも問題があるのではないかと考えています。

真の意味での多様化の阻害要因というのは、例えば、私も小学校は随分離れてしまいましたが、幼稚園で桃太郎が5人いるような演劇だったり、小学校の運動会でかけっこに順位をつけず、皆で手をつないでゴールしたりと、それが本当に多様化の助けになっているのかと思います。運動会でかけっこが速い子はかけっこが速いですが、美術で絵が上手な子は、必ずしもかけっこが速いわけではないと思います。それぞれ得意なことがあって、それぞれを伸ばしていくことを、そのようなやり方によって阻害しているのではないかと以前から思っていました。また、学校教育において、極端に競争させなくなっていますが、社会に出た瞬間から競争しかないわけなので、本当に箱入りで大事に育てられて、学校が終わって、社会に出た瞬間に放り出されて、では頑張ってねという状況だと、人として脆い状態で荒波の中に出されているようなものなので、やはり学校教育の中である程度厳しさを伝えていかなければならないと思っております。

人としての強さとは、精神的な強さや肉体的な強さもありますが、コミュニケーション能力であったり、いろんなことを行うための強い意志であったり、それを行うための能力だったり、そういった社会を生きていくために必要な部分の教育が、今の教育の中で欠けているのではないかと思います。以前、教育委員会の中で具体的に申し上げまし

たけれども、キャリア・スタート・ウィークで行う職場体験について、私の会社でも何度か受け入れたことがあるのですが、子どもたちからは、割り振られたから仕方なく来ているような印象を受けました。中学生であろうが、社員であろうが、お客様に接するのであれば、うちの社員として扱われます。そのため、挨拶くらいはしっかりと学校で教えて、指導してから送り出してくださいと学校にお願いをしたところ、そこも含めた指導を頼まれました。私はそれは違うのではないかと思います。少し具体的な話になりますが、キャリア・スタート・ウィークは、見直すべき部分があると思っていて、我々も本気で受け入れて本気で子どもたちを育てたいと思うのであれば、給料を出しても良いと思います。しっかりお金を払って、それが直接個人に渡されなくても、お金を出して、君たちの働いたお金でこんなものが学校に揃えられましたというのは大事なことだと思います。そういったことが今の教育の中で欠落している部分ではないかなというふうに思っています。

話が飛躍しますけれども、人を強くするということで、上越市で教育すると社会的に生きていく能力が高くなって、例えば、上越市の学校から出た子は離職率が 1%しかないとなれば、親は上越市で育てたいと思うわけです。親としては、子どもを学校生活だけ見ているわけではなくて、一生、生きていけるように見ていきたいわけですから、強さというのは教育に求めたいところではあります。今そこら辺が欠けているのかなと思いますし、強さというのはいろんな意味で大切になってくると思います。

【山縣委員】

私の子どもは 3 人とも成人したのですが、仕事として主に小学校に上がる前のお子さんとその保護者の方、小学校低学年のお子さんとその保護者の方と関わる機会がとても多いです。

まず、教育とは何だろうと考えたときに、とにかく生きていくため、生き抜いてもらうためということが最終目標だと思っています。親としては、子どもはとにかく生きていてくれたらそれで良くて、そこからいろんなことを求めると思います。今だんだんと言われてきていますが、日本の学校教育において、どうしても知能検査などで分かるような認知能力を伸ばすことに重きが置かれていると思います。それは受験のせいもあるとは思います。親として、子どもにはやっぱり幸せに生きて欲しいので、そのためにはどうすればよいのかと考えたときに、大谷委員の人としての強さということにもつながると思いますが、学力では測れないような非認知能力を伸ばすことにも力を入れていけると良いと思います。非認知能力は意欲、頑張る力、忍耐力、セルフコントロー

ルする力、自制心、精神力、協調力、コミュニケーション能力、応用力、覚えたことから想像していく力、工夫する力など、普通のテストでは測れないような能力を伸ばすことが、社会に出て幸せに生きていくための力をつけていけることになると思います。本人の非認知能力がうまく育っていなかったり、自己肯定感が低かったりすることもそうですが、子育てをしている保護者の方の自己肯定感の低さがいろんな問題を引き起こしていると見てとれる気がします。自己肯定感は自尊感情とも言われていますが、自分が生きていく意味や存在価値、大切な存在で必要とされているということを自分が感じられる感覚であり、それがないと他の排除につながり、いじめや引きこもりなどのいろんな弊害が出てくるのではないかと思います。非認知能力と自己肯定感はつながっていると思っていて、教育でも言われ始めている生きる力を身に付ける、学力とともに、本当は学力以上にかもしれませんが、そのようなことを学んでいけるような教育を目指せると良いと思います。

今回の教育大綱の人を育てる、地域を作る、未来を拓くという三つの観点は全て人を育てるところにつながっていくと思っていて、なかなか一つずつの観点ではお話しできませんが、先ほど市長もお話しされていたように、地域をつくっていくためには、上越での楽しい経験をいかに子どもたちが積んで、良いところだという思い出を作ってもらうかということが重要だと思います。親だけで子育てをできるわけはないので、もともと人間は種としてそうなっていると聞いたことがありますが、社会全体として、子どもを見ていけるような教育体制、先ほどコミュニティ・スクールでは桑取地区が理想的だということをお話しいただきましたが、本当にそうだと思いますし、それを他の地域でも、どううまくできるのかを考えていけたら良いと思います。

最終的に一人一人が認められ、大切な存在だとお互い思える、自分は大切な存在であり、そうすると他の人も大切な存在であるということが分かっていけるような教育がなされると良いと思います。どうしても子どもを中心に考えてしまったのですが、大人になっても同じことが言えると思います。しかしながら、大人になってからの教育は分からないところで、社会全体としてどのようにすれば、そのようなことを理解してもらえるのかというのは分かりませんでした。

【小林委員】

個人的なことを申し上げますと、中学校の教員から校長まで27年間勤め、最後は城北中学校でした。その間、11年間は教育行政に携わり、今、3年間、上越教育大学で総合的な学習などについて、学生たちの指導に当たっているところです。

人を育てる、地域をつくる、それから未来を拓くとそれぞれ分かれているのですが、私はそれぞれ全部関係づけて、この三つが成り立っていくのだろうという思いを前提にお話ししたいと思います。

まず、地域の強みと課題を見ていったときに、私の主観で作った図ですが、教育問題の連鎖については、上越市だけではなく全国のいろんな地域に共通することだと思います。この図の中で、それぞれ教育に関わる課題が次の課題に結びついて、原因と結果となっています。矢印で簡単に示していますが、特に太い矢印で示したもの、例えば、18 歳からの流出とありますが、18 歳くらいになるとだんだん若者が外へ出て行ってしまい、そのことが少子化に伴う様々な学習集団や地域集団の減少へとつながります。そうすると、ＰＴＡや子ども会、町内会の活動がなかなか思うようにいかなくなってきます。そこから他の要因もあいまって、学校に多くの機能を期待され、機能の多様化とその量的拡大によって、なかなか学校の中で子どもたちを丁寧に育てていく余裕がなくなってくるかもしれません。また、他の要因もあいまって、子どもたちの社会性が低下し、それがもとになって、いじめや不登校の問題に発展してくるかもしれない。そして、地域に居場所がなくなり、子どもたちが成長に伴って地域外に出ていく一つの要因になるかと思います。全くの主観で繋いだ図ですが、このようにループになった問題の連鎖はどこかで断ち切らないと、永遠に続いてしまうと思います。このような課題を、どう乗り切ったら良いかを考えたときに、上越の教育の強みがあると思います。伝統的に地域と結びつきを大事にした教育の風土がありますし、コミュニティ・スクールやキャリア・スタート・ウィーク実行委員会、協力してくださる多くの事業所の皆さんもいます。また、頑張って子どもたちをいかして祭りに参画させている町内会や子ども会もありますし、上越教育大学のボランティアや大学院生がいろんな学校にフィールドワークで出向いていったりしています。これらの強みがばらばらではなく、互いにつながり合っていくことができれば、多くの力をもっと発揮できるかと思います。

次は、私がある研究プロジェクトに加わりながら作った図です。社会の中には様々な課題や解決しなければならない問題がありますが、こういった課題や問題に対して、社会教育や学校教育の立場から、様々な団体や機関、多様なアクターがあります。その中の誰かがリーダーとなって組織が動き始めるとそれが連携、起動、協働して発展していきます。そこに教育の営みが関わると、教育というのは特に子どもが関わってくると、皆そこに協力しようという機運が高まっていきます。大人も何か興味を持って学習するとそこに利害の対立が克服されてくると思います。こういう学習、それから課題の共

有、活動を経て、そしてチームとなっていくことを通して、地域の中にコミュニティが再活性化し、ソーシャル・キャピタルと言って、信頼や人々のつながりなどが成長します。そのことが、若者たち、子どもたちが地域を好きになっていく一つの要素となり、持続可能なまちづくりにつながっていくだろうと思います。

こうした枠組みを作っていきたいときに何が課題なのかということですが、一つの指標として、国際成人力調査があります。この調査は 10 年に 1 回行っていて、今年調査が行われ、公表は 2024 年だそうです。左側のグラフの縦軸は数的思考力、横軸は新しいことを学ぶことが好きだと答えた人の割合です。これを見ると日本は数的思考力の平均点は世界でトップクラスですが、新しいことを学ぶことに対しては消極的です。これをスウェーデンと比較したのが右側のグラフで、年齢とともにどう変化するか分かります。新しいことを学ぶことが好きだという日本の 20 代の割合はスウェーデンの 65 歳の割合と同じです。つまり、何となく分かったつもりで、思考力も知識も豊富だけど、新しいことを学ぶことに対して消極的だということです。これはイノベーションがうまくいっていないとか、地域がうまくいってないとか、いろんな組織がうまくいってないことの一つの要因だという見方になっています。このような動きを生み出しているのは、もしかして学校教育の中にあるかもしれません。試験で良い成績を取れば、何か見返りがあるといった利得欲求だけを動機づけとして学んでいったときに、新しいことを学ぶことに対して、いずれどこかでつまずいてしまい、減退してしまうのではないかと思います。

この逆の例として、Ｋさんの例が出ていますが、これは平成 17 年に上越教育大学附属小学校で、関川の上流から下流までを探検をしたり、様々な体験をしたりする活動を行いました。水質に興味を持ち、環境保全をどうしたら良いのかと考えていくうちに、川で鮭が泳いでいるのが見つかって、この鮭をどうしたら復活できるのかということについて小学校 4 年生が取り組みました。名立川で採取した鮭を関川に放すか、それとももとの名立川で放すか大激論になって、結局子どもたちはこのＫさんを中心に、関川に放して、4 年後の関川の水質に期待しようと、いろんな思いを残した実践となりました。Ｋさんは 4 年後、中学 2 年生になり、関川に、そのときの先生や仲間を呼んで行って見てみると、鮭が遡上してきたそうです。そのことに興味を持ったＫさんはさらに、環境や地球のことについて探究し、今、ＪＡＸＡで人工衛星の研究をしています。Ｋさんの言葉として、僕にとって川と宇宙の出会いは同じだったと言っていたそうです。子どもの学びが大人になっても続いていて、Ｋさんは宇宙について勉強しています

が、思いは上越に絶えずあるのだという一つの例だと思いますし、このような学びを子どもから大人まで繋いでいくとき、ＳＤＧｓが一つのキーワードとして、一つの手段として、一つの考え方として成り立つと思います。ＳＤＧｓは国際連合で設けられた 17 の目標と 169 のターゲットからなる目標群で、世界中で取り組んでいるものです。地域の中でいろんな考え方があると思いますが、この目標に向かって進んでいったときに、教育と地域、子どもと大人、皆がつながっていくのではないかと思います。ＳＤＧｓはいきなり出てきたようですが、学校教育の中ではすでに 2000 年代から取り組んでいて、それはＥＳＤと言っています。ＳＤＧｓは一つの目標で、それを教育でどう進めるかというのがＥＳＤです。例えば地域ぐるみで取り組んでいる一つの例として岡山市があります。下の図の中にありますように、学校教育では大学から幼稚園まで、それから行政から民間企業まで様々なステークホルダーが、ＥＳＤの取組を行っています。批判的に考えるとか、多様な見方や考え方をするとか、コミュニティを作るとか、大谷委員がお話ししていた社会の中で通用する力ともつながってくるものがあると思います。

実践例の二つ目を紹介します。ＳＤＧｓの大賞を取った川崎市の平間小学校についてです。多くのステークホルダーが地域の皆さんとともにＳＤＧｓの達成に向けて、できることから行っていて、非常に地域との結びつきが強く、うまくいっています。なぜ川崎市はそれができたのかを調べていくと、1990 年代から地域教育会議として、地域の人たちが何回も話し合いながら、学校教育だけではなく、大人の教育についても、参画型、ボトムアップ型で、話し合う組織を作りました。学校が何かしたいと思ったときに、地域の皆さんの協力が得られやすい、このような土壌は上越にもきっとあると思います。

三つ目の例として、城北中学校が、学区でありながら、なかなか子どもとの縁がなくなってしまった中ノ俣に何回も足を運びながら、地域から生き方や生活文化、自然を学んで、この先の日本の地域づくりのあり方を探求していく学習を行いました。これは中ノ俣の皆さんや地球環境学校の皆さん、創造行政研究所の皆さん、多くの方々からの協力を得て行ってきました。城北中学校はユネスコスクールとして認可を受けていますので、世界や日本各地の学校とも交流する機会を設けていると思います。

地方創生のための五つのＳＤＧｓの活用方法とあります。一つの考え方ですが、未来を描けるということ、共通言語であるということ。また、地域づくりの入口でもあるし、世界の現状と比べてどうなのかというものさしにもなります。それから五つ目、チェッ

クリストとしても機能すると思います。

最後に、これは教育ではなく、私が実際に訪れて感銘を受けた、和歌山県の湯浅町についてです。湯浅町は小さな町ですが、金山寺味噌やしらす丼などが有名で、日本の醤油の発祥地としても有名な所です。観光客が平成 10 年の 26 万人から、平成 25 年には倍近くの 49 万人まではね上がっています。これは、大規模な観光施設を作ったわけではありません。まちづくり委員会の委員 35 名、協力推進員 300 名が 2 年間で 250 回ものワークショップを行い、自分たちの地域をどうしていくかという夢を語り合って、具体化していく、そこに京都大学や様々な専門機関が協力して、地域を盛り上げ、国からお金を引き出しながらも、景観づくりに取り組んでいった結果だと思っています。こういうことを教育の中でもきっと応用できると思い、取り上げました。

【本間委員】

家庭教育の究極の目的というのは、子どもたちが生まれた家庭から巣立った後に、元気に健康に一人で生きていける力をつけるということだと思います。生きていく過程で、他の人の力を借りる機会もあるかもしれませんし、それは借りても良いのですが、やはり家庭から巣立って、生きていけることが一番の目標だと思っています。

自分のことをお話ししますと、私は対人援助職の仕事をしていますので、寝ている時間以外はほとんど周りにたくさんの人がいる環境で生活しています。今日も午前中、11 時半ぐらいまではその中にいました。そのような生活を送っている中で、私がこの教育大綱の内容について考えたことをお話ししたいと思っています。

教育大綱を教育の施策や具体的な取組を考える上での理念とするのであれば、一言で言えば、エンパワーメントだと思っています。エンパワーメントというのは、元気にするとか、力をつけてもらうとか、そのような意味があると思いますが、そのエンパワーメントしてもらう対象は、どの年齢層にも当てはまると思っていて、子どもだけでなく市民全員をエンパワーメントすることが教育の一つの理念だと思います。

人を育てるということについて、児童、生徒の学習には、きっかけづくりや動機づけ、興味づけが、エンパワーメントできる一つの段階だと思っています。そこから探究心が育ち、芽生えた探究心に対して自分で調べたり、探求する方法を先人が子どもたちに伝えたりすることでまた学びが深まっていくと思います。その探求していく過程は主体的な活動なので、その学習過程は自分でやり遂げたという気持ち、達成感につながり、それは自立につながると思います。山縣委員がお話ししていた自己肯定感も高まりますし、やはり子どもたちをエンパワーメントすることができると思っています。

また、地域づくりと人を育てるという二つのテーマに関連することですが、担い手の育成というのが大きな課題だと思います。地域活動に関わってくれる人や地域のリーダーとなってくれる人、地域の皆をエンパワーメントしてくれる人を育成できるような施策があると良いと思います。上越の人と関わる仕事に就こうと思ってくれている人、上越市の事業所で働こうと思ってくれる人、そんな人が増えるような施策があれば良いと思っています。身近な話ですが、私は障がい者の福祉施設で働いていて、ここ数年慢性的な職員不足に悩まされています。利用者からのサービス利用の希望があっても、その希望を叶えることができないというケースが本当に多くなっています。利用者は市役所から受給者証をもらっていて、サービスを受ける権利はありますが、供給する側のサービスが追いついていないという状況です。そのような状況がずっと続いていて、本当に申し訳ないといつも思っています。特に新卒の方の就職希望者がすごく減っています。毎年１人、２人で、その１人、２人も退職してしまうことが多いです。学校を卒業して、上越市で就職しようと思ってくれる人が減っているのだと思います。市長と同じで、上越市に帰って来て上越市の事業所で働きたいと思ってくれる人が増えてくれたら良いと思っています。

地域づくりの観点から、他人ごとを自分ごととして一緒に考えられる気持ちが育つような風土が良いと思っています。人材の活用はやはり地域も活気づきますし、地域の文化も継承されていくと思います。各家庭に配られる広報上越をいつも見ていますが、今年度に入ってから、市民の方々の登場がとても増えたような気がしています。また、ＪＣＶで放送されている番組でも、地域の頑張っている方々、地域をエンパワーメントしてくれている方を紹介していて、そういった身近な取組も地域の頑張りを知ってもらえるとても良い機会だと思って見ています。

最後に、今後の未来について考えてみますと、上越は東京への鉄道交通の利便性が非常に高いと思います。それに加えて、今、ＩＣＴの活用が盛んになっていますし、自分の生活基盤がどこであるかというのはそれほど重要でなくなってきていると思っています。上越にいても、日本のいろんな場所や世界とつながることができますし、上越にいてもどんどん学びの幅を広げることができるのではないかと考えます。今大学ではオンライン留学という言葉も聞くようになってきていますが、日本にいながら、外国の大学の授業を受講することも行われています。上越にいても他の地域との繋がりをつくる取組が進んでいけば、人口流出を抑制することができると考えます。

以上のことから、私は教育大綱の理念はエンパワーメントが一番良いと考えました。

【中川市長】

これから、自由に意見交換をしようと思いますが、早川教育長から何かありますか。

【早川教育長】

それぞれの立場から、大変貴重なご意見をいただきました。私も重ならないように、思っていることをお話しさせていただきます。大谷委員からは、学校の目指す姿と社会が求める姿のずれということでご指摘いただきましたし、非常に納得いくところがありました。それから山縣委員からは非認知能力の重視についてお話しいただき、これはとても大事な部分だと思っていて、学校教育でも大事に取り組んでいるところです。小林委員からは、市の強みをどう生かしていくか、持続可能な社会の実現に向けて、強みを生かして、人材育成をしていくということで他市の実践例等も踏まえた貴重なお話しをいただきましたし、最後の本間委員からはエンパワーメントについてお話しいただいて、やっぱり教育は、人を元気にする、人を勇気づける、それは年齢に関係なく全ての人に対して必要だと思いました。どれも大事なことですが、私が今感じているのは、上越がいかに多様性に対応していくまちになれるかだと思います。データから申し上げますと、今上越市の人口は約 18 万 7,000 人で外国人籍の方が 1,800 人います。学齢児が 60 人ぐらいいると思います。外国籍の方は率にして約 1%で、今後まだ増えていくと思います。当然学齢児も増えていくだろうと思っていますし、なかなかその対応には学校もいろんな面で苦慮しています。それから、特別支援学級、特別支援学校に在籍している子どもたち、特別支援学校や学級ではないけれども、通常の学級で、いろいろな特別な支援を受けている通級も含めて、約 2,400 人います。子どもの数は 1 万 3,000 人ほどなので、その中の 2,400 人が何らかのかたちで特別支援を受けています。率にすると 18%であり、5、6 人に 1 人は支援が必要な状態であるということです。外国人の方々、特別支援が必要な方々、それに、格差の中で生きづらさや悩みを抱えている方々がたくさんいて、表面的なものだけではなく、内面的に抱えている多様性もあるので、それをお互いにどこまで理解できるか、上越市が目指す共生社会というのは、そういうところをいかに受け入れて、そしてともに新しい上越市を作っていこうということだと思っています。

先ほどから未来をつくるには、自立できるたくましい力、パワーが必要だという話があり、全くそのとおりだと思いますが、自立心やたくましい力も決して独りよがりのものではなく、大勢の人の中で、他との関係の中で自立できる力が必要だと思います。ですから、自立と共生は背中合わせの関係にあって、どちらも大事だと思います。そうい

うことを、学校だけではなくて、社会全体を通じてともに考えながら、この上越市を作っていかなければいけないと思っています。

いろいろなご意見をいただきましたので、また私は学校教育の経験者ですので、子どもたちにはまずこういったことをしっかり教えていきたいと思っています。

【中川市長】

皆さんのご意見などをお聞きして、私からお話ししたいと思います。

私はもともと大阪と兵庫に育った関西人でございます。20 年前に桑取地区に入りました。この桑取の生活は、皆さんが生きる知恵を持って、そして助け合いながら生きています。生きていくために必要な材料を自分たちで確保し、足りないものを協力し合いながら使い、水や燃料、食材も全て地元で供給しながら暮らしてきたということです。大谷委員のお話にもありましたように、今の若い人たちの力が弱いという感じがしています。市の職員とも話していますが、やはり 20 代、30 代の力が弱く、退職が多いということです。私は選挙の最中にお金がなく、土木事業を 3 か月、3 交代の仕事にも勤めましたが、あのような仕事に、今の若い人たちが耐えられるのだろうかという感じはありました。ですので、生きるために何が必要なのか、そのために何をしていかなければならないのかということが、子どもたちの中で理解できていないことが多いのではないかと思います。そのため、今の 60 代以上の方々から、現場で教育を受けていくということは大切なことだと思います。

私ももともとよそから来た人間ですので、上越市の魅力や価値がどうして生かされていないのだろうという思いを持っていました。すばらしい土地ですが、いろいろな関係の方とお話ししますと、子どもや孫に対して、上越市は何もないから帰ってこなくて良いと、子どもたちに言っている大人が多く、まず大人が地元を愛して、そしてそれを子どもに伝えていかなければ、上越市、地元の良さは、子どもには伝わらないと思っています。ですから、私もよそ者の立場で市民の皆さんにいろいろなメッセージを届けていますが、上越市を肯定する大人の姿勢、誇りを持つ大人の姿勢というのが、おそらく、子どもたちが上越市は良い土地だ、すばらしい土地だと思うことにつながり、上越市へ帰ってくる一つの要因になるのではないかと思います。否定的に捉えてはいけないと思います。前向きに上越市という土地を捉えていくことを教育の中でも進めていかなければならないと思っています。現場で体験すること、そして、よそから見たらこういう良いところがたくさんあるということを子どもたちに伝え、地元の人たちも誇りを持つことができれば、教育ができる素地になるのではないかと思います。

他に何か意見がございましたら、お願いします。

【小林委員】

地元の魅力をしっかりと体感して、そのすばらしさを味わいながら、その地域づくりに貢献するというお話がありましたが、小学校中学校も総合的な学習の時間を中心に、それぞれ地元の良さをＰＲしたり、発見したり、それをホームページに出したり、ＳＮＳで発信したり、いろんな活動を行っています。学校によってはさっきお話ししましたようにお祭りを町内で企画するところまで行っています。問題は、高校生がどうなのかということです。教育委員会も、小・中学校が管轄ですので、高等学校がどうなっているかということについて、関心はあるけれども情報がなく、高校と地域との繋がり、あるいは高校教育の中で、その地域の良さや活性化など、その辺がどう扱われているのかを私たちも足を運んで見ておかなければならないと思います。チャンスがあるのは、高校も今、総合的な探求の時間が始まって、全国の高校の中では、地域のいろんなところに入り込んで、その地域の課題解決にあたっているところもありますので、何とか市と高校あるいは教育委員会と高校、小・中学校と高校、そんな繋がりが設けられたら良いと思っています。

【大谷委員】

市長がお話しされたように、確かに上越市は住みやすく、すごく良い土地です。私も大学に行ったとき、上越市から離れたかったわけです。それは、親元から離れたいという意識もあるし、一旗揚げたいという思いがあって、東京に行きました。そこで初めて気づく上越市の良さにというのは、おそらく上越市にいる若者にいくら言葉で伝えても、伝わらないと思います。今、私の息子が大学入試を受けています。地元に残るのであれば、上越教育大学を受けるという選択肢もありますが、上越市から出るという選択をしています。やはり一度外を見るというのも大事なのではないかと考えています。小林委員がお話しされたように、確かに高校で、どのような教育をしているのかというのはすごく大事で、例えば、この辺りだと一番大学進学率の高い高田高校は大半が県外に出ます。高田高校の校友会は、東京の方がはるかに発展していて、高田高校を卒業し、上越市に残っているのは、夢破れた人か、地元に仕事がある人かです。東京に行った人と話をしていても、やっぱり上越市に戻れるものなら戻りたいと言っています。ただ、彼らが活躍できる場所がないわけです。だから戻りたくても戻れないのだと思います。ですので、子どもたちに上越市が良いところだと伝えるのは、もちろん大事ですが、一度上越市から出て、上越を見てみることも結構大事なのではないかと思います。

【中川市長】

そのとおりだと思います。時代の流れによって、ジョブ型、要するに、終身雇用ではなく、いろんな技術を身につけて、リモートで仕事をしながら生きていく人がだんだん増えています。そうなったときに、上越市にもチャンスがあるのではないかと思っていますし、大学に行って、やっぱり上越が良いと思ったときに、上越に帰ってきて起業できるようなチャンスもつくり出していかなければならないと思っています。高校生の皆さんにも、小・中学生の皆さんにも、そういう思いを持っていただければ、若い人たちが帰ってくるチャンスは増えてくると思っています。私も東京に 3 年間いて、とても住めないと思いまして、今ここにいるわけです。

ほかにご意見ございませんか。

【本間委員】

教育長がお話しされていた共生社会についての話です。私は障がい者の福祉施設に勤務していますが、施設の人たちと関わっていない人はどんな人たちがいるのか分からない世界だと思います。そういった中で、ここ 10 年くらいで地域サービスが活発になり、ヘルパー業務がすごく活発になっています。そのため、強度行動障害と言われている人たちもヘルパーと一緒にどんどん街中に出ています。そのサービスのヘルパーを 3 年ぐらいしていたことがありました。その強度行動障害の方たちと、プールに行ったり、温泉施設に行ったり、買い物に行ったり、散歩したりするのですが、やはり何かの拍子に調子が悪くなることがあります。そんなときに、おそらくそういう方を見たことのない人たちが、大丈夫ですか、お手伝いしますかと声をかけてくれて、驚きました。パニックを起こし、大きな声を出して、自傷行為をしている人とヘルパーとして電話をかけようとしている私を見て、見ていましょうかと言ってくださる方がいました。意外と皆さん知らないだけで、自分が目にしたり、関わったりすれば近くなると思っています。外国人の子どもたち、特別な支援が必要な子どもたちという括りもありますが、皆で何かをする経験というのをどんどん教育の中に入れていって欲しいと思います。職場で保育実習の担当をしていますが、実習の日誌には学校の勉強や教科書で書いてあったことと全く違い、実際に関わってみて、こういう仕事がしたいと思ったと書いてくれる人が結構いました。いろんな人がいて当たり前という空気を教育の中で作っていってほしいと思います。

【中川市長】

今、おそらくどこの業界も人材不足だと思います。企業が立地したとしても周りの業

界から人材が奪われ、日本人が足りず、最終的には外国から人が来るということで、上越市は、今その岐路に立っています。国として人口減少対策を取らなければ、外国人の方が増えていくというのは必然ですので、教育委員会においても外国人を受け入れていく体制、地盤を作っていかなければいけないと思っています。

支援学級、支援学校、通級などいろいろあるのですが、支援というのは何が普通なのかということを私たちが勝手に決めているだけの話で、逆に言えばその人たちは個性があるのではないかとも考えられるわけです。だからそのような考え方にしていかなければいけないだろうと思っています。どちらが劣っているということではなく、どの子がどういう特徴があるのかということだと私は思っています。

他にご意見はありますか。

【山縣委員】

私も教育長がお話しされていた、多様性がキーワードになると思っていて、いろんな人がいて、自分と価値観が違う人もいます。皆がこの多様性を認められる人になれれば生きやすい世の中になると思います。私は子どもセンターで幼児期のお子さんを見ていて、本当に個性豊かなお子さんが多いですが、その子たちを避けるのではなく、いかにうまく付き合っていけるかというのは、お子さんを見つつ、親子を見つつ、自然とつき合い方を学んでいます。教育とは離れてしまいますが、保護者の方もいろいろな個性、発達の問題がある方もいます。学校現場も苦労していることもあるとは思います。教育とは違う福祉の問題になってしまうのかもしれませんが、お互いの多様性を認め合い、一人一人が存在価値を持って、一人一人が役割を持って行けたら良いなと思いました。

【小林委員】

多様性の観点からいうと、先ほどのＳＤＧｓの取組やユネスコスクールでは世界の様々な地域と大人も子どももつながることができます。先週まで 2 週間、中国の先生方とオンラインで交流し、発見がいっぱいありました。また、マスコミで伝わってくる情報と全く違う個性とか特性が見えてきて良かったと思うのですが、そういう体験は、大人も子どもも必要かと思います。

先ほど高校生のことを取り上げた理由として、中学生までは、地域との繋がりとか、何かの行事に参加するきっかけやチャンスがありますが、高校生になると途切れてしまうと思うのです。地域の中で、自分が必要とされているのか、あまり関わりがないと思ってしまうと、そのままあまり意識しないで、外へ出てしまうと思います。上越タイ

ムスに掲載されていた高校生の対談では、とっても素直に自分たちの考え方、将来について、話しをしています。そこでは、やはり地域の魅力やこの地域をどうしたいかとか、そういう話はなかなか出てきません。高校生の一般的な傾向だろうと思います。若者たちが、何か自分たちで取り組んだら、地域が応えてくれるとか、自分たちの活躍の場があるとか、そういうことが必要かと思います。

熊本県の産山村へ行ったときに、子ども議会というものを行っていました。何が村に必要なのか、データもそろえて、その子ども議会で真剣に子どもたちが話し合っていました。例えば、阿蘇山の中に天文台があれば、自分たちも科学に関心が持てるし、観光で人に来てもらえるだろうということで、全国の方々から協力してもらい、200 万円で実際に天文台ができました。また、村に川が流れているのですが、川の名前が地元の人が使っている名前と違っていて、馴染みの深い川にしたいという決議を行い、大人が協力して国交省に交渉し、川の名前もついに変えてしまったという事例もあります。これは大人と子どもが協力しているところだと思いますが、何か社会参画への魅力、意欲、自信、自己肯定感を作ってあげられたら良いと思っています。

【中川市長】

小・中学校で地域の体験をしていくことやこの上越市がどれだけすばらしいところなのかを子どもたちに理解させることも、私は大切な教育だと思っています。肯定的に地域、あるいは上越市を捉えていく教育というのも大事だと思っています。もちろん、共生社会、多様性、そしてこれから持続的に暮らしていくためには、何が必要なのかということも段階を経て、教えていかなければいけないと思います。皆さんからいただいた意見を大切にしながら、上越市の教育大綱を作っていかなければならないことを認識できました。今日は本当に貴重な意見ありがとうございました。

【早川教育長】

この教育大綱は学校教育だけではなく、社会教育、要するに子どもから大人、全ての市民の学びという観点から作成するものです。学校教育が大きな柱だとは思いますが、地域づくり、未来づくりのための人材育成、全ての市民に関わる学びの大綱ということを今一度確認させていただきたいと思います。

【中川市長】

高校もという話になれば、今、世界では、例えば大学を卒業していなくても、高校でデジタル技術を学べばそのまま企業に引き抜かれるような教育を行っているとこもあります。ですから、日本人が当たり前だと思っていた教育というのが、だんだん世界の

中で変わりつつあるということも認識しながら進んでいかないと、世界の中で遅れてしまうのではないかという感覚もあります。私たちは、今の社会の変動を広く見ながら、教育を行っていかなければいけませんし、とにかく前向きに明るく地域をつくりながら教育も行っていくことが大事だと思いますので、皆さんのご協力よろしくお願いします。

短い時間ではありましたが、教育委員の皆さん、それぞれの教育に対する思いの一端をお聞きすることができ、次期教育大綱策定に向けても、大変に参考になりました。教育というと、どうしても学校教育、子どもというイメージを持たれがちですが、全ての市民に関わる一生涯を通じた学びであり、それが上越市を作っていくものであるということを理解していただけるような、次期教育大綱を策定し、発信していければと感じました。

他にご意見等はございますか。

【教育委員】

特になし

（４）その他

【中川市長】

事務局から何かありますか。

【市川教育部長】

ご協議ありがとうございました。事務局からは特にございません。

【中川市長】

教育委員の皆様から何かございましたらお願いしたいと思います。

【教育委員】

特になし

（５）閉会

【中川市長】

他にないようであれば、本日の協議は終了といたします。熱心なご協議、誠にありがとうございました。

【市川教育部長】

以上を持ちまして、令和３年度第２回上越市総合教育会議を閉会いたします。